RIPPLE SAILING CLUB
NO. 94

月刊 1990・7・15

RIPPLE

（発行） 500円
リプル・セイリングクラブ
〒238−03
神奈川県横須賀市長井2−11−1
TEL 0468−57−1711

不定期便 リプル海洋文庫 "しがらみのクルージング"

誰でも雨の日のセーリングなんか歓迎しないものである。
狭い業界のしがらみで時としてそんなことを言っていられない時がある「誰のお陰で艇を置いていられるんだっけ？。」その一言で3泊4日の回航に行く羽目になってしまったSは期待と後悔が半々のまま、ばりちょんの新艇の41Ftのクルーザーに乗り込んだ。デッキはオールチーク張りのいかにもクルージング艇と言った感じの艇なのだ。我がリプル号と違い何処を見ても新品なのである。あたりまえか！。
オーナーは今日の時節にもれず不動産会社で税金対策船なのだ。

雲が低く垂れ込む小雨のぱらつく中、一路岡山県の牛窓のヨットハーバーを目指し京急マリーナを後にしたのは昼少し前の事である。
何度か回航を共にした気心の知れたI氏、A氏、S氏の3人は冗談を言いつつ艇を進めて行くと、我がホームゲレンデの長浜は霧のためあっと言う間に見えなくなってしまったのである。晴れていれば大島等の伊豆諸島が左に見え快適クルージングの筈であるが一向に晴れる様子の無い気圧配置なのである。

夕暮れ近く神子元島付近の三角波帯を無事乗り越え、石廊崎を交わす頃には日もとっぷりと暮れ当り一面墨を流したような海面に成っていた。穏やかな日のナイトだと、バウで切り削く波に驚いた夜光虫が両舷に満天に輝く星空のようにきらきらと映し出し、天空には宝石を散りばめたような幾千という星が輝き、大変ロマンチックな気分に浸れるものであるが、今回の回航はそんなもんじゃなかった。

時間と共に風速も徐々に上がりだしおまけに真上りになってしまったのである。土砂降りのようなバウスプレーを浴びながら、暗闇の中どでかいメインを降ろし、機走一本で遠州灘を進んで行く事にしたのである。幸いにもエンジンの馬力が強力なため7．5ノットは確保できたもののパンチングはもの凄いものがあり幾度となく洪水のような海水がデッキを洗って行くのである。そして、遠くに、近くに本船の船影がレーダーにびっしりと映しだされていて頻繁に行き交ったり、追い抜かれたりもして、とてもワッチ交代を出来るような状態ではなくなっていた。そして一同も狂ったように遠州灘を突き抜け、日が変わる真夜中には台風並の9ノットを記録したのである。

予定では途中帰港せず潮岬を交わす筈であったが、給油と艇の点検とそれにも増して休息のため、紀伊半島付け根にある尾鷲に立ち寄ることにした。

一晩中ひたすら横殴りのバウスプレー浴び夜も明ける頃、辺りの海面の状況が把握できる様になり、次々に襲いかかりそして過ぎて行く大きなうねりが目視出来るようになり、俺達はこんな所を走ってきたのかと改めて驚いたものである。そして、依然本船航路を走っているためかひっ切り無しに右舷、左舷に本船がすり抜けて行く。中にはブリッジに全く人影の無い本船も何隻か確認でき、時々マスコミを賑わす海上での衝突事故が納得出来てしまうのである。

3人が交代で横に成れるようになったのは昼近くであろうか。オイルスキンを着たまま僅かな時間ではあるが"バーン！バシャシャシャー"という不気味な音を子守歌にし寝つくのであるが1秒もしない内にワッチの時間になってしまうのには閉口した。

そして、疲れきった3人のクルーを乗せた41Ftのヨットが懐の深い尾鷲港に入港したのは午後4時少し回ってからである。

給油、点検を済ませ塩まみれの体を癒してくれる銭湯の有難さは天国のような気がしたものだ。

翌朝元気を取り戻した3人は日の出にはまだ時間の早い朝5時、雲一つ無い熊野灘を南下し潮岬を目指した。一昨夜の嵐が嘘のような海面に日が出る頃にはS氏は既にほろ酔い気分であった。

単調な航海である。デッキ上には昨夜濡れた衣類が難民船のように塩を噴きながらたなびいている。昼頃であろうか潮岬を交わす。昔彼女と来た潮岬燈台を今は海から眺めていると思うと、酔いも手伝ってか感無量になったS氏であった。

紀伊水道を一路鳴門海峡を目指すが、鳴門の転流時の情報を知りたく一時四国の高松港に入港することにした。街の明りに燈台が埋もれてしまい入港航路が分かりずらい高松港に入港し、一番奥の県庁前の通称"ケンチョピア"にもやいを取ったのは真夜中の12時を少し回っていた。焼肉屋のおばちゃんに新聞をもらい艇に戻り残マイルを計算すると朝5時出航が一番と言うことになった。

後少しで目的地という安堵感と出航までの中途半端な時間をつぶすには、ちょっくら何処かで一杯やるかとなり、いかがわしいお店で時間をつぶし、艇に戻ったのは4時半。キャビンの中でうだうだと時間を過ごすが酔いと疲れで3人とも"ふーっ"となり目が覚めたのはなんと6時半である。鳴門海峡では既に転流が始まっている時間なのである。通常だと6時間待つか、淡路島を巻いて行くかであるが、血の気の多い3人の意見はすぐまとまった。

フルスロットルで海峡を目指す。海峡大橋が見え出す頃にはチョッピーな三角波が辺り一面に広がっていた。橋の手前1Km位になると海は川となりごうごうと音を立て流れて来ているのである。更に近くまで艇が進と川の流れと共に、海水が海中から大きな輪になり盛り上がってきているのである。そしてその輪が幾つも出来それが大きな輪になり渦を巻いているのである。気の性か海峡を挟み瀬戸内海と紀伊水道が大きな階段のように成っているのである。3人の緊張は最高潮になった。たった500mに満たない海峡を通過するのにフルスロットルで何と40分もかかってしまったのである。

艇は大きな静かな湖の様な瀬戸内に入り込むと一路牛窓を目指したのである。

2時少し過ぎ大役を果たした3人を待ち受けていた物は、本との本当に食べきれなかった、鯛、車海老、あわび、等どうしてこんなに注文したの？という畳1畳分も有ろうかという刺身の盛り合わせだった。何せ帰りには46Ftの艇をまたまた注文してしまう東京マネー、大阪マネーを動かし、羽振りの良い不動産の社長さんなので我々庶民とは、かなり違うなーと感心してしまったものである。

帰りは酔いのため翌朝に成ってしまったが、雲の切れ間から見えかくれする太平洋を見降ろし、3日も掛けクルージングした距離をたった1時間で済ませてしまう現代社会の味気なさにちょっと落胆しながら機内の窓の外を見つめるS氏であった。

ニュースタッフ紹介

新しいアルバイトの紹介です。
当年取って25歳の鈴木泰治君です。鮪漁船に長年乗っていて、現在5、000t迄操船できる2級海技師航海士の免許取得のため下船しているとの事です。図書館とリプルを行ったり来たりですが、航海、天文航法とかはお茶のこさいさいです。暇を見て世界の港の話なんかを聞いてみて下さい。

Tシャツ作りました。

Tシャツを作りました。
サイズはL，Mだけです。価格は2、000円です。
物は、いつもの背中に3色プリントをした物です。